

清水ヶ丘の風

ハルモニーコール楽事通信第27号

2016年12月17日

マタイ受難曲におけるコラールとその原曲

以前の楽事通信でも述べているように、「マタイ」には曲冒頭に Choral と銘打っている単純な4声体のコラールが12曲、大編成のコラールファンタジーが2曲(第1曲と第29曲)、テノールのレチタティーヴォとコラールの組み合わせが1曲(第19曲)とコラールは15曲もあり、全68曲のうちかなりの割合を占めている。コラール(ドイツ語による讃美歌)はマルティン・ルターによる宗教改革時代に生まれたもので、教会で全会衆によって歌われるため単純な旋律が用いられた。バッハは受難物語の進行を図る福音史家による聖句の朗読と、登場人物のその時の感情を歌うアリアなどの合間の要所要所に当時の聴衆に馴染みのあるコラールを挿入することにより、受難曲全体を立体的により親しみやすいものに仕上げている。

「マタイ」のなかでも最も有名なコラールと言えば第54曲の「O Haupt voll Blut und Wunden おお御頭血と傷にまみれ」であるが、この原曲は作曲家ハンス・レオ・ハスラー(1562-1612)の歌曲集にある「Mein Gmüt ist mir verwirret 我が心千々に乱れ」であり、作詞者は不詳だが以下のようなメロディーと歌詞を持つ一青年の失恋の嘆き節で、1601年に発表されて以来世俗歌として広く愛唱されたという。

Em Am Em F C G C E Am
1. Mein Gmüt ist mir ver - wir - ret, das macht
Bin ganz und gar ver - wir - ret, mein Herz
F Dm E | 1. Am | 2. Am C | G Dm G
ein Jung - frau zart; } Hab Tag und Nacht kein
das kränkt sich hart. }
C G Dm E Am Em
Ruh, führ all - zeit gro - Be Klag, tu stets
Dm Am Em Am G Em Dm C Dm Dm/F E
seuf - zen und wei - nen, in Trau - ren schier ver - zag.

(第1節の歌詞概訳)

僕の想いは 乱れている
それは優しい乙女のせい
なにかも 乱れている
僕の心は ひどく傷つき
昼も夜も やすまらず
いかなる時も 嘆いているばかり
いつも溜息と 涙に暮れるばかり
悲しみの中で 意気消沈の有様

歌詞は5節あり各節冒頭の一字ずつを拾うと、純情な青年の心を憶悩と悲嘆に突き落とした相手の乙女の名前がMARIAになるというのも面白い。この旋律が1613年に教会コラール集の聖歌「Herzlich tut mich verlangen 心から私は願う」に採用され、さらにその50年後パウル・ゲアハルトがこの旋律に「O Haupt voll Blut und Wunden」という受難を内容とした10節にわたる歌詞を付け、ドイツにおいて最も有名な受難コラールとなり(このように世俗歌を宗教曲に置き換えることをコントラファクトゥアと云いルターなどにより盛んに行われた)、日本でも讃美歌136番「血しおしたたる」(讃美歌21 310・311曲)として教会で歌われている。バッハはこのゲアハルトのコラールを「マタイ」において受難コラールとして調を変えて5回も使用したのである(第15曲ホ長調、第17曲変ホ長調、第44曲ニ長調、第54曲ニ短調→ヘ長調、第62曲イ短調→フリギア調、ただし第44曲は旋律は同じだが歌詞はゲアハルトの別のコラールから採用された)。この5曲は同じ旋律でも歌の内容により雰囲気それぞれ違っており、バッハの作曲技法に感心するばかりである。

「マタイ」の最初のコーラルである第3曲「Herzliebster Jesu 心から愛するイエスよ」の原曲はヨハン・ヘールマンの1630年の同名コーラル(曲はヨハン・クリューガー)の第1節で、その第3節は第19曲、第4節は第46曲に用いられている。これに対し第10曲「Ich bin's, ich sollte büßen それは私です、私こそ償うべき者」と第37曲「Wer hat dich so geschlagen 誰が一体あなたを殴ったのですか」の歌詞はゲアハルトのもう一つ別の受難コーラル「O Welt, sieh hier dein Leben おお世よ ここにお前の生命を見よ」の第5節と第3節から採られたものだが、その旋律は15世紀のハインリッヒ・イザークの故郷別離の歌「Insbruck, ich muss dich lassen インスブルックよ さようなら」に基づくと言われている。

Inns - bruck, ich muss dich las - sen, ich fahr dahin mein
 Stra - ßen, in frem - de Land da - hin. Mein
 Freud ist mir ge - nom - men, die ich nit weiß be -
 kom - men, wo ich im E - - - - - lend
 bin, wo ich im E - - - - - lend bin.

(第1節の歌詞概訳)

インスブルックよ 僕はお前を去らなければ
 僕は自分の道を見知らない国へとたどる
 僕の喜びは 取り上げられてしまった
 僕は それを取り戻すすべを知らない
 僕は 何と哀れなのだろうか

この曲はオーストリアのインスブルックで行われた冬季オリンピック(1964、1976)のテーマソングであり、現在でも室内楽などでかなりポピュラーなものだが、コーラルの方は趣むきが大幅異なり原曲を直ちに想起させるものではない。そのほか第1曲冒頭合唱のバックボーンとしてソプラノ・リピーエーノが歌うコーラルはニコラウス・デーツイウスの「Agnus Dei 神の子羊」のドイツ語訳(1522年)によるもので、残りの第25曲、第29曲、第32曲(旋律はボヘミア民謡に基づく)、第40曲はそれぞれ16世紀・17世紀に作られたコーラルが原曲である。ちなみにバッハは「マタイ」と同じコーラルを自作のヨハネ受難曲や、クリスマス・オラトリオ、カンタータにいくつも用いている。

ところで「マタイ」のコーラルは、時にイエスを弾劾する群衆の叫びに対し信徒の感情を代弁する役割が多いが、その主体(誰が誰に対して歌っているのか)を調べてみると、一人称の個人である「私(ich, mir, mich, mein)」が二人称の「あなた(du, dich, dein 神またはイエスを指す親称)」に呼び掛けているのが大半(15曲中9曲)である。「私達(wir, uns unser)」が主体であるのは第1曲と第29曲のみ、二人称の du を主体とするのが3曲(第2曲、第44曲(この曲の du は神またはイエスではなく信徒を指す)、第54曲)、三人称(刑罰 Strafe ほか)が主体であるのが1曲(第46曲)ある。このようにコーラルの殆どの主語が「私達 wir」ではなく「私 ich」であるというのは、西洋人は私達という共同体としての意識よりも独立した個人として神(イエス)と対峙するという意識(個人と神との一対一の契約)が強いこと、また神(イエス)を敬称(Sie)ではなく親称(du)で呼び掛けるのは神を身近に感じ自分の内なる神に向かって祈るということなのか。多神教の一般的な日本人と唯一の神を信じるキリスト者との観念の相違なのだろうか。いずれにせよ「マタイ」のコーラルは聖句で語られることを現代の私達も自分自身の出来事として共感をもって歌いかつ聴くことができる役割を果たしていると言えよう。

(参考資料:大村恵美子「東京バッハ合唱団月報第511・512号」・磯山雅「マタイ受難曲」東京書籍・ウィキペディアほか「マタイ」のコーラルに関する各種のウェブサイト上のブログ)

【後記】今年の最終号となりましたが「マタイ」のコーラルについてまとめてみました。皆さんはどのコーラルがお好きでしょうか。筆者は何といてもイエスの死の直後に歌われる第62曲です。なお上掲の原曲とその旋律を用いた讃美歌、「マタイ」の関連コーラルを集めたCDを作成中です。希望者には配布しますのでお申し出ください。(山田)